

中国諸民族の言語

『長田夏樹論述集（下）』第12章
(原載：『神戸外大論叢』第10巻2号, 1959年2月)

第1節「中国諸民族の分布」では隋代の中国諸民族の民族名を漢字・中古音・民族言語を対比させながら列挙する。その典拠を挙げた注が圧巻であり、一つ一つの地名を考証するための細かな手掛かりを提供している。第2節「少数民族の自治区」では中国の少数民族自治区・州・県を挙げる。

第3節「言語資料の種類と価値」は4頁あまりと短くはあるが、まず明代以前のアジア東部諸言語の碑文資料などを列挙する。即ち、突厥文字碑文、契丹文字墓誌・哀冊、女真文字碑文、ウイグル式蒙古文字およびパスパ文字碑文、唐蕃会盟碑などのチベット語碑文、西夏文字碑文、ミャゼディー碑文、ラームカムヘン碑文、アンコールワット碑文など。ついで華夷訳語を概観し、そして212-3頁は豊かな内容を含む素晴らしい2頁である：

まず、印欧語比較研究において大きな役割を果たすリトアニア語のような古風な言語として、チュルク語派の裕固語、モンゴル語派の土族・保安・東郷語、チベット語群の嘉戎語、安南語におけるムオン語、インドネシア語派の高砂語の重要性に触れる。

ついで、「《身体》は西藏文語では *sku* であるが、嘉戎語では *tə-skru* であって、これは漢語の「軀」にあたる。」とし、「區」を声符とする一連の字を挙げ、牙喉音の他に「樞」*tʂ'iu* 「疆」*t'iu* が説明しがたかったことにつき、チベット語諸方言で *kr->tʂ-* などとなる変化様式を引く。「軀」については、*sk'ru>k'iu* と説明することもできる、と述べる。ここで挙げられている一連の諧声系列は *Karlgren, Grammata Serica, No.122* にはない文字も挙がっているの、沈兼士主編『広韻声系』169-171頁にも拠った如くである。

また、カム＝タイ語との比較に際しても「夾」を声符とする諧声系列を挙げる：

中古中国語音	竜州土語とその意味	シヤム語
挟 <i>kap</i>	<i>ko:p</i> to hold up with both hands	<i>kɔ:p</i>
々 <i>ɣiep</i>	<i>nip</i> to pinch, to take with chopsticks	<i>k'ip</i>
狭 <i>ɣap</i>	<i>kap</i> narrow	<i>k'æ:p</i>
莢 <i>kiep</i>	<i>ke:p</i> husk of rice	<i>ka:p</i>
蛺 <i>kiep</i>	<i>kap</i> butterfly, moth	

第4節「中国諸民族の言語とその分類」では周辺諸国も含む諸言語の下位分類と代表的な地点を網羅し、各々の地名には重要な調査報告が対応していることが多く、接したことのある言語名を見ると心躍るであろう。巻末に諸語族の語彙対照表も付す。（遠藤光暁）